

仏心と葬弁儀 ーその18ー

人生経験豊かな人材を迎える

創業以来、丸和堂の草創期を支えたスタッフの存在は以前にもご紹介いたしました。ここにもう一人、どうしても外すことのできない人物のお話をしておきたいと思えます。

創業から9年を経た昭和52年、新たに常務取締役として迎えたTさんは、豊かな人生経験と温厚な性格、それでいて豪快さと優しさを兼ね備えた人柄、しかも堅実な実務派としての力量や幅広い人間関係などを持っていました。これらに感嘆した飛田が、やはり懇願して丸和堂に迎えた人物でした。

そんなTさんの経歴は実に多彩なものでした。大正2年に群馬県に生まれ、郷里の村役場で書記として4年ほど奉職した後、当時日本領であった樺太で警官になりましたが、ここで終戦を迎え、夫人と幼い子供2人を残してシベリアへと抑留されてしまいます。

Tさんが暮らしていた豊原もソ連軍機の空襲を受け、避難のために駅前に集まっていた人たちなどに多くの犠牲者が出たといえます。そんな「修羅の

世界」をはからずも経験したTさんが、後に丸和堂で死者の冥福を祈る業務に就くことになるのも、また一つの因縁といえるのかもしれませんが。

脈々と受け継がれる丸和堂精神

飢えと寒さで大勢の仲間を失ったシベリア抑留からTさんが帰国を果たしたのは昭和22年1月。妻子とも再会し、道警の巡査として旧職に復帰することができました。

翌年、釧路市に転勤となり30年に警部補で退職すると、すぐに釧路市役所に再就職し、市立病院の管理課長として手腕を発揮しました。このとき、病死した患者さんの湯かんにも携わったことから葬儀の仕事にも抵抗なく入り込めたとTさんは語っています。

丸和堂に入社後も、知る限りの人を訪ね歩くなど抜群の意欲と行動力で周囲を驚かせたTさん。高齢をもって第二・第三の人生を生き抜く姿は、ほかの多くのスタッフにも大きな影響を与えたのでした。

ーつづくー

■次回の掲載は二月二十七日(土)を予定しております。